

「安全な食品は高い」を6割が容認 主婦の選択に、食費格差の波

2007年には食品への信頼を揺るがす事件が多数起こった。しかし、一般の主婦たちの反応は、どこか冷めていたようにも見える。家庭の食卓の中心となっている女性たちは、「わが家の食の安全」について今、何を思っているのか、どう行動しているのか、その複雑な心の一端をレポートする。

リビング新聞ネットワークでは2006年度から、家庭と地域での食を考える「わが家ごはん・地元ごはん・ニッポンのごはん」キャンペーンを行っている。その取り組みのひとつとして、リビングぐらしHOW研究所では、アイ・マーケティングアドバンス株式会社と共同で「生鮮食品の買い物と安全性意識調査」を行った。

主な目的は、生鮮食品の購入実態に加え、流通や生産者の意識的な取

り組みへの反応の調査だった。が、結果として見えてきたのは、食費と安全性の両立のジレンマの中にある子育て中の主婦たちの姿だった。

今、子供を守るために安全性に対して特に敏感であると思われる主婦が、「あきらめモード」に入りかけている。2008年も「食の安全は付加価値、お金を出せないなら仕方ない」という方向へさらにシフトするの。まずは現時点の主婦の声に耳を傾けてほしい。

食品の値上げが続く中、5割の家庭が食費5万円未満

今回の調査は、リビング新聞のウェブサイトで「えるこみ」のユーザーに対し実施。中心層は30代〜40代、子供を持つミセスである。勤労者世帯の1カ月間の平均的食費は約7万円(※)。今回の調査では3万〜5万円未満が一番多く、5万円未満が50%を超える(グラフ①)。末子が中高生以上の家庭に限っても7万円未満が58.2%となった。週に1万円〜1万5000円強で、家族3〜4人の食卓をやりくりしている、というのが中心層だ。

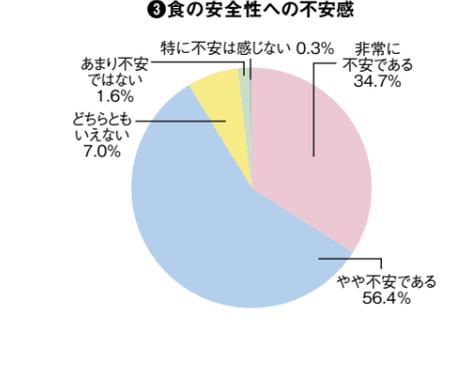
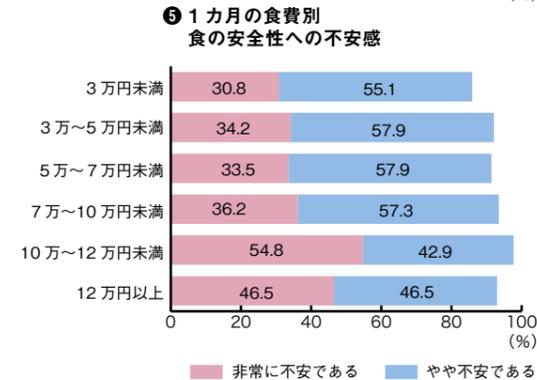
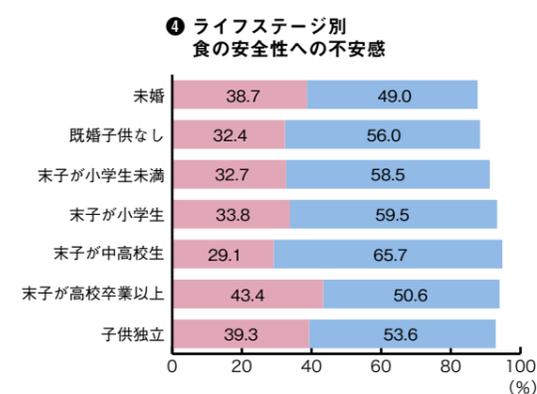
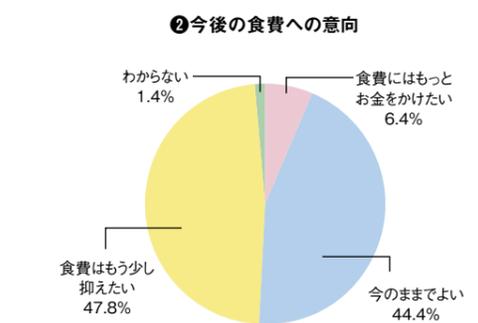
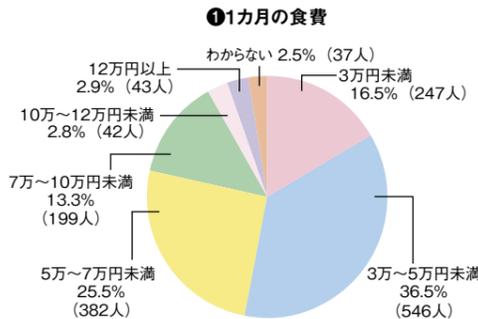
ここで注目したいのが、今後の食費への意向。「もう少し抑えたい」という回答が47.8%(グラフ②)。さらに家計の中で最も節約したい費目を聞くと、1位は「水道光熱費」、2位が「食費」となった。

「もっとお金をかけたい費目」は、子供なしと末子が小学生未満では「貯蓄」、末子が小学生〜高校生では「教育・教養費」が非常に高い。末子が高校卒業以上のシニア世帯になって、「食費」が「もっとかけたい費目」として浮上してくる。

「食の安全性」9割以上が不安

相次ぐ食品の偽装事件もあり、当然ながら9割以上が「食の安全性」に不安を感じている(グラフ③)。中でも「非常に不安」の割合が高いのは、末子が高校卒業以上のシニア世帯だった(グラフ④)。一般的に、幼い子供を持つ母親の方が食の安全性についての意識が高いのでは?という予想が覆される結果となった。

また食費との関連で言えば、食費10万円以上の層で「非常に不安」な人の割合がぐっと上がることも特徴的だった(グラフ⑤)。



調査概要

調査期間 2007年8月30日〜9月9日

調査方法 サンケイリビング新聞社が運営する女性向けウェブサイト「えるこみ」ユーザーを対象にしたウェブアンケート

集計人数 女性1496人

回答者プロフィール

平均年齢 40.17歳

年代 20代9.2%、30代44.8%、40代30.1%、50代12.0%、60代以上3.9%

就労形態 専業主婦57.5%、パート・アルバイト17.2%、フルタイム勤務18.0%、その他7.3%

ライフステージ

ライフステージ	割合	人数
子供独立(別居)	3.7%	56人
未婚	13.0%	194人
既婚子供なし	22.5%	336人
末子が小学生未満	25.9%	388人
末子が小学生	14.8%	222人
末子が中高生	9.0%	134人
末子が高校卒業以上	11.1%	166人

(※) 総務省統計局家計調査2006年

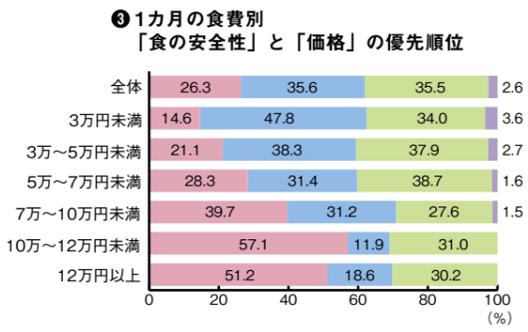
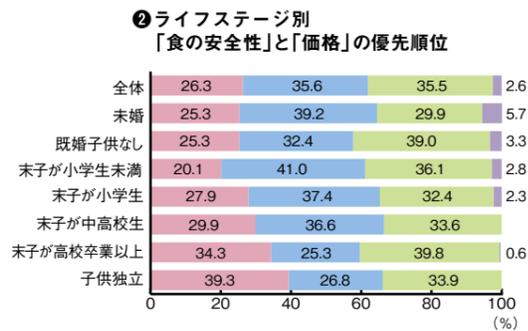
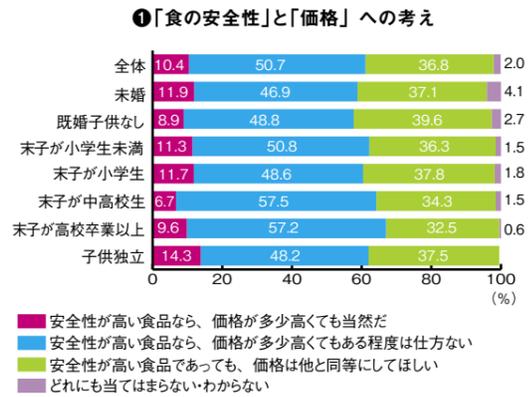
「安全な食品は価格が高い」と6割が容認 しかし…安全性より価格を優先させる人も35%

では、食の安全に不安を持つ主婦は、安全にこだわった食品を選択するのか？そこは「筋縄ではないかないところ」である。まず、「食の安全」と「価格」についての考えを聞くと、「安全性が高い食品なら、価格が多少高くても当然」あるいは「ある程度は仕方ない」といった、「安全」高い」という現実を容認する人が全体で約6割。ライフステージ別に見ても差は大きくない(グラフ①)。

しかし、実際の買い物となった場合、安全性と価格のどちらを優先して商品を選ぶか聞いたところ、「安全性優先」が約26%、「価格優先」が約35%、「食品によってさまざま」が約35%。特に末子が中高生以下の子育て世帯、1カ月の食費が5万円未満の世帯では、「価格優先」が「食品によってさまざま」をも上回る(グラフ②)。

～フリーアンサー～
私たちが価格が折り返わず買ひ控えた国産食品リスト

- ニンニク** 高いなあと思います。でも中国産は買いたくない…。結局ガーリックパウダーを購入するようになった。(大阪府/34歳)
- レモン** 大分産や熊本産のすだちで代用している。(熊本県/35歳)
- ブロッコリー** アメリカ産の倍の値段だと買うのをやめたくなる。(愛知県/31歳)
- 黒ゴマ** 価格の問題というより店頭でほとんど見かけないため買えない。(東京都/43歳)
- ソーセージ** 牛肉を購入する時は産地を気にするけれど、ソーセージに入っていると分からない。子供が食べるのに。(東京都/34歳)
- マツタケ** 年に一度は縁起物として食していたが、庶民には手が届かなくなりそう。(千葉県/43歳)
- トウガラシ** 高いというより売っていない。(神奈川県/43歳)
- うなぎ** 5年前は週1で購入していましたが、今は月1になった。(大阪府/41歳)
- ひじき** 外国産に消毒の味を感じて以来、食べる量が減ってしまった。もっと気にせず食べたい。(和歌山県/34歳)



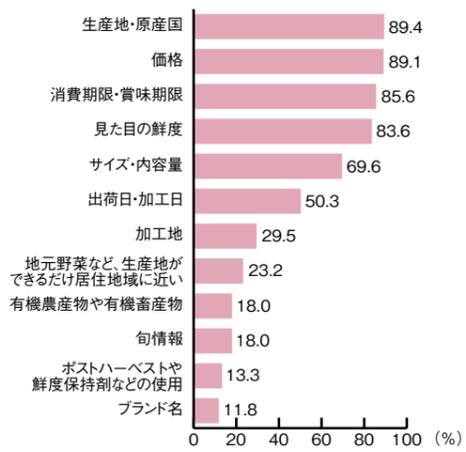
生鮮食品でチェックするのは「生産地・原産国」

食品偽装事件では表示にまつわる問題が多かった。では、主婦が生鮮食品を買うときには何をチェックしているのか？今回「価格」とほぼ並んで1位だったのが、「生産地・原産国」。中国産の問題が騒がしかった時期の調査ということもあるが、「価格」や「消費・賞味期限」と同程度、確実にチェックされている。少し割合は落ちるが、表示関係では「サイズ・内容量」「出荷日・加工日」

がこれに続き、5割以上が注意している(グラフ④)。

さらに、1カ月の食費が7万円以上の層になると、「生産地が居住地に近い(「地元産」)」、「有機農産物・畜産物か」、「ポストハーベスト・鮮度保持剤の使用の有無」などをチェックしている人が、全体と比較し5ポイント以上高い割合となり、ここでも7万円未満の層との行動の差が見られた。

④生鮮品の買い物時に注意していること(複数回答)



もっと欲しい情報は「鮮度の見分け方」「保存方法」

生鮮食品についての参考情報は、今店頭にあふれている。そんな中、どんな情報が「もっと欲しい」と思われているのか？安全性に関する情報は足りているのか、届いているのか…？

「国産牛以外のトレーサビリティ」(※)で32.0%。「食品表示やマークの意味」17.7%、「生産者の写真や詳しい生産地域」13.8%と、安全性への不安感に対して、高いニーズがあると言いがたい結果となった(グラフ⑤)。

⑤もっと知りたいと思う生鮮品関連の情報(複数回答)



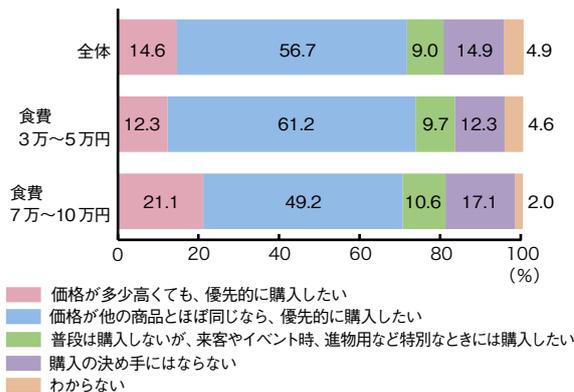
国産ブランド、顔の見える食品、トレーサビリティ：「価格が変わらないなら、優先的に購入したい」

最後に、消費者に安全性や高品質をアピールするため、生産者や流通、また一部行政も力を入れている「国産ブランド」「生産者の詳細情報付き」「トレーサビリティシステム付き」。これらがどの程度消費者の心に届いているのかを聞いた。認知や情報の活用についても聞いたが、ここでは、価格と関係した購入意向を取り上げる。

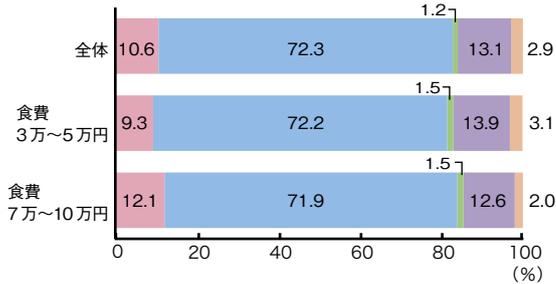
まず「価格が多少高くても優先的に購入したい」という回答が多かったのは、「国産ブランド」(グラフ①)、「生産者の詳細情報付き」(グラフ②)、「トレーサビリティシステム付き」(グラフ③)の順。ただし、15%〜9%程度であり、多くの消費者の心をつかんでいるとは言いがたい。

一方で「購入の決め手にはならない」という回答も、すべて15%以下。大多数を占めたのは「価格が他の商品とほぼ同じなら、優先的に購入したい」だった。実はこれも、1カ月の食費が7万円以上の層と未満の層では差がある。食費が高い世帯に対しては、特に「国産ブランド」生鮮食品は、購入の動機として、ある程度は機能していることがうかがえた。

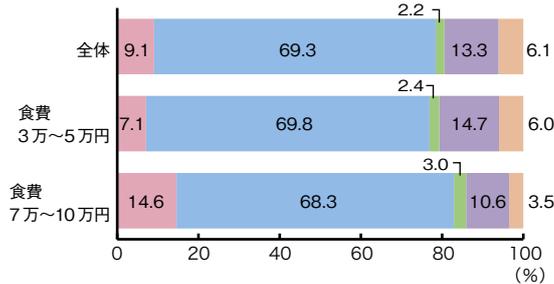
① 国産の「特定の産地やブランド」にこだわった生鮮品の購入意向



② 「生産者の詳細情報付き」の生鮮品の購入意向



③ 「トレーサビリティシステム付き」の生鮮品の購入意向



「安全⇨高価格」の一般化は「がんばる子育て家庭を突き放す」

今回の調査での発見のひとつは、生鮮食品の安全性についての意識と行動は、世帯の食費額と関係が深い、ということだった。

では、食品の安全性は、プラスアルファの付加価値であっていいのだろうか？ 忘れてならないのは、「普通の価格で、当たり前前に安全な食品を買いたい」という、ごくごく当然のニーズがあった上で、どうにもならない現状と何とか「折り合い」をつけている主婦たち。その努力にもかかわらず折り合いがつかなくなり、食卓の安全性にある程度は目をつぶって自分を納得させている…そんな主婦の心情だ。それに応える取り組みが、本来的には今、求められている。